さざんか

かとう学園　宗像市立河東中学校
学校通信第40号（R5. 12. 6）

陸上部、九州大会で第８位入賞という快挙！

12月2日（土）熊本県天草市の「あましんスタジアム」（天草市陸上競技場）で開催された第43回九州中学校駅伝競走大会で１時間３分43秒という好タイムで見事８位入賞を果たしました。これで本年度の総合体育大会の日程が終了しますが、有終の美を飾ってくれました。

新生徒会執行部誕生！ 河東中に新時代の幕開け

一人一人の個性というピースをつなぎ、新しい河東中というパズルをつくる

11月 28日（火）の生徒会役員改選により、河東中第38代生徒会役員が誕生しました。今回の改選により生徒会長・副会長・書記の3役が決まり新執行部として活動します。7名の役員にこれからの抱負を語ってもらいました。 新役員の決意を2回に分けて掲載します。今回は、生徒会長と副会長の3名の決意表明です。次号にて書記の4名の決意を載せます。新専門委員長を含め、12月22日（金）に任命式を行います。

【　生徒会長 石橋 彩香 さん 】

新しく生徒会長になりました石橋彩香です。私は、変化を楽しむことのできる河東中学校をつくりたいと思います。一人一人が自分の個性を生かしながら、新たな自分と出会い変化していくために、新しいことに挑戦する機会をつくりたいです。これからの一年間で一人一人の個性というピースをつなぎ、新しい河東中というパズルをつくっていきたいです。また、これからの一年間で色々な経験をスポンジのように吸収し、みなさんの学校生活の活性化のために全力を尽くしていきます。よろしくお願いします。

【　副会長 鈴木 晴士 さん 】

こんにちは、生徒会副会長になりました鈴木晴士です。僕が生徒会でしたいことは公約や演説で話したこと以外にもたくさんあります。この河東中をよりよくするためには、みなさんの協力が必要不可欠です。そして、今この場にいられるということはみなさんのおかげだということを心に刻み、みなさんにとって「日々の生活を楽しめるような学校」にしていきます。 選んでもらったからには、期待を超えるような活躍を見せたいと思います。一年間よろしくお願いします。

【　副会長 吉原 由來 さん 】

こんにちは！ この度、生徒会副会長に就任しました吉原由來です。私が生徒会副会長になったからには、会長を支え自分の仕事に責任をもち、いろいろなことに積極的に取り組み最後までやり遂げます。そして、演説でもお話ししたように河東中学校を明るく楽しく感謝の言葉があふれる素晴らしい学校に作り上げていこうと思います。みなさんが安心して過ごせるようにこれから精一杯がんばりたいと思います。よろしくお願いします。

冬の枯れ木に美と力を見出す視点
～内村鑑三の描いた感性と世界観、冬の意味と価値について～

冬の寒さが日に日に増してきました。北風によって校内や街の木々も葉を落とし一面の枯れ木となりました。それは一見、物寂しく心を沈ませる光景です。しかし、少し見方を変えれば、その枯れ枝の中に新しい芽が育まれていることを感じ取ることができます。今回、紹介するのはそのことを教えてくれる明治の偉人・内村鑑三の『寒中の木の芽』という詩です。

この詩は、四季による自然の移り変わりを詠んだものですが、人間の心の内側を表現したものでもあります。そして、内村の意図は冬の自然の新しい見方によって、苦悩を抱えた人の心をいやそうとしているところが読み取れます。その点に注目して読んでみてください。

寒中の木の芽

一、 春の枝に花あり 夏の枝に葉あり 秋の枝に果あり 冬の枝に慰(なぐさ)めあり

二、 花散りて後(のち)に 葉落ちて後に 果失(う)せて後に 芽は枝にあらわる

三、 ああ憂(うれい)に沈むものよ ああ不幸をかこつものよ ああ希望の失せしものよ 春陽(しゅんよう)の期(き)近し

四、 春の枝に花あり 夏の枝に葉あり 秋の枝に果あり 冬の枝に慰(なぐさ)めあり

春と夏と秋にはそれぞれ人間の目を楽しませ豊かな生活に結びついているものがあります。春の花、夏の緑、秋の果実に象徴されます。一方、冬は寒く冷たく耐え忍んですぎるのを待つイメージがあります。

しかし、内村の視線は、花や葉や実だけでなく、誰もが関心を示さない枯れ木にも美を見つけます。その視線は同様に自然界にだけでなく人の心にも向けていきます。

人の心も春夏秋と同じように、楽しくうきうき温かい状態の時があります。一方で、冬のように辛いことが起こったり悲しい出来事に出会ったりすることもあります。しかし、内村は冬の大切さを「冬の枝になぐさめがある」と表現しています。つまり、冬の枯れ木には次の新しい芽が宿っていることを見通しているわけです。だから、花が散り葉が落ち果実がなくなった後の冬の枯れ枝に今はまだ見えない芽という生命力を感じているのです。第三連はまさに、そのことを人の心に置き換えているわけです。人の心もゆううつな時、不幸で希望を失う時もあります。でも、そうした心の冬の状態の時、実は樹木と同じように新しい芽が息づいていることを表現しています。いやな出来事や不都合なこと、悩ましいこと苦しいことは、私たちを成長させる力を裏に見えない形で秘めているのだと内村は言っているのでしょう。むしろ、自然界に冬が必要なように心の中にも冬が必要だと言っているのかもしれません。

内村のものの見方は、すべてのものに何らかの意味を見出そう、世の中にあるものはすべて必要なものだという態度がうかがえます。人はどうしても自分に都合のよいものを欲しがり、大事にしようとします。春夏秋はそれぞれ人間にとって都合のよいことが多いです。冬はえてして都合の悪いことが多いです。苦労や不都合、めんどうくさいことなどもそうです。そうした冬も心的不都合も、ただ通り過ぎるのを耐えて待つという方法もあります。いつかは春がやってくると思って。しかし、内村が求めているのはそういう態度ではなく、冬には冬の良さと価値があり、冬の楽しみ方があり、自然を成長させている力があって、そのことを気づくべきだというものです。同じように心的不都合に対しては、自分のものとしっかりと受け止めて、自分の成長の糧にすべき大切な機会にすべきだと言っているわけです。この詩は、自然や心の中の新しい見方・考え方が表現されているように思います。